

音楽科教員養成における模擬授業の傾向分析

—導入部に着目して—

大野内 愛

(広島大学大学院人間社会科学研究科)

Trend Analysis of Demo Lessons in Music Teacher Education: Focusing on the Introductory Section

Ai ONOUCHI

Abstract

This article aims to clarify tendencies in them by focusing on the introductory section of demo lessons. The research method consists in an analysis of teaching behavior. The purpose of the class entitled “Studies in Teaching of Music”, which is given to second-year students, is to acquire the necessary knowledge and skills to become a music teacher. After being taught the interpretation of the course of study, evaluation method, and writing a teaching plan, students take a 15-minute demo lesson. As a result of the analysis, I discovered five trends. First, few teachers confirm what they have learned or know, which was found to result from their lack of understanding of the curriculum and of studying the teaching materials. Second, there are many explanations by teachers, which was caused by the fact that it was their first demo lesson, they were lacked knowledge. Third, many teachers ask simple questions. Consequently, they were unable to motivate learners or deepen their thinking. Fourth, few teachers evaluate students. As it was their first demo lesson, they were unable to evaluate them and had no vocabulary. Fifth, students do not speak independently, as they are not surrounded with a free-speaking atmosphere and they have been unable to motivate themselves. However, a reason for this student issue was that university students played the role of students, which did not properly reflect the behavior of junior and senior high school students. Thus, I aim to consider a teaching method that will improve the teaching ability of students.

1 はじめに

本稿は、広島大学教育学部音楽文化系コースの中学校・高等学校教員免許状（音楽）必修科目である「音楽科授業論」における学生の模擬授業の導入部に焦点をあて、教授行為の分析から傾向を明らかにすることを目的としたものである。

本科目は2年生の後期に設定されており、音楽科教員に必須の知識・技能の習得を目的としている。学習指導要領の解釈、評価の観点と方法、学習指導案作成の書き方についての講義を踏まえ、履修者全員が15分間の模擬授業を行う。

音楽科授業の教授行為に関する研究では、山中ら（2012）が熟練教師と新任教師の音楽科授業における教授行為の比較を実施し、熟練教師の教授行為は意図が明確であること、新任教師は熟練教師よりも「説明」を重視し、熟練教師は「活動」を重視していること（p.85）を明らかにしている。また谷本（2017）は、教師2名の音楽科授業における発言を20項目の発話分析カテゴリーにより分類した結果、「思考の促し」「受容」「取組への価値の提示」が、主体性の基盤となる自己充実欲求を求める働きかけであること（p.83）を明らかにした。こうした先行研究により、音楽科授業の教授行為において「活動」を重視すること、学習者へは「思考の促し」「受容」「取組への価値の提示」といった発話が重要であると理解できる。授業の展開部を充実させることは非常に重要であるが、授業は導入から開始されるものであり、導入において学

習者の関心を授業に向けさせることが、その後の展開部に大きく影響すると考えられる。授業や教材を構成する過程を9種類の教師の働きかけに分類したガニエは、導入部において「学習者の注意を喚起する」「学習目標を知らせる」「前提条件を確認する」の3つの教授事象を示している（ガニエら 2007, p.233）。隅（2019）は、実技教科における導入部の教員の発話の質と量が、展開部における児童の活動を支えているという仮説を立て、図画工作科、音楽科、体育科の導入部の教師による発話と展開部の児童の活動への影響を調査した結果、教師の「同意」に分類される発話を増加させることが、展開部の有効性に繋がる（p.230）と明らかにした。

教員養成においては、以上のような理論を踏まえて模擬授業の指導を行うべきであるが、そもそも人生で初めての模擬授業を体験する学生たちの導入部における教授行為には、どのような傾向があるのだろうか。これを捉えずして、教員養成における授業の工夫をすることは困難であろう。

したがって本稿では、学生の模擬授業の導入部における教授行為と生徒役の反応について、まずはガニエの9教授事象のうち導入の3教授事象に分類し、その事象について傾向を見ること、そして山中ら（2012, p.81）の教師の発話の分類項目を参考に分類項目を定め、教師役の教授行為を分類し、その傾向を見る。

2 調査方法

(1) 調査概要・対象・授業者

本稿における調査日、授業対象、授業者は下記のとおりである。

- 調査日：2020年10月8日～11月26日（毎週木曜）
- 授業対象：「音楽科授業論」の履修者のうち半数の学生¹⁾
- 授業者：「音楽科授業論」の履修者のうち、導入部を授業した学生20名²⁾
- 授業の題材・教材：中学校、高等学校の音楽科教科書の中で筆者が指定したもの

なお、授業者は全員、これまで音楽科の授業を実施した経験がなく「音楽科授業論」での模擬授業が初めての経験である。

(2) 分析方法

まず、授業者20名が行った教授事象・教授行為を時系列に文字化し、秒単位で分類する。

教授事象の分類については、ガニエの9教授事象のうち、導入の3事象および、その3事象のどれにも含まれない「その他」を合わせて4つに分類する（表1）。「その他」とは、生徒指導に関する事象や、事務的な連絡などである。

表1 教授事象の分類項目

教授事象	説明
学習者の注意を喚起する	学習者の注意を向けるような世間話、クイズ、モデルを見せることなど
学習目標を知らせる	この授業をとおして何ができるようになるのかを知らせることなど
前提条件を確認する	前の時間に学習したことなどを復習したり、授業に関係する内容を復習することなど
その他	生徒指導、事務的な連絡など

教授行為の分類については、前述のとおり山中ら（2012）の項目に加え、特に教師が声を発しない「板書」「操作」「沈黙」を加えた。本稿における教授行為の分類を表2のように定める。

表 2 教授行為の分類項目

教授行為	説明
指示	学習者に次の活動や行動を促すもの
発問	学習者に思考を促す問いかけ
説明	学習者に対する学習内容や活動方法の説明
評価	学習者の行動や発言に対する評価
応答	学習者の発言に対する応答
質問	授業に深く関係しない問いかけ
活動	学習者と一緒に行った音楽活動や学習者の活動場面
誘導	次の活動への誘導
指名	発表時の指名など
注意	授業態度への指導など
確認	次の活動について、説明に対する理解度の確認
板書	板書や、黒板への掲示など
操作	音響機器や PC などの操作
沈黙	次の言葉が出てこないなどの沈黙
その他 (内)	オーディオ操作についての発言など、授業進行には関わるが、授業内容には関わらないもの
その他 (外)	前の授業はなんだった？など、授業進行や授業内容に特に関わりのないもの

さらに、この中で「活動」に分類されたものの中には、学習者の活動として「音楽活動」「話し合い」「発言（応答）」「発言（自発性）」「私語」「沈黙」が存在する（表 3）。したがって、学習者の活動としてこの 6 項目を秒単位で分類する。

表 3 「活動」のうち学習者の活動の分類項目

学習者の活動	説明
音楽活動	歌唱、楽器演奏、鑑賞といった音楽活動、準備運動
話し合い	数名での話し合い
発言（応答）	教師による問いかけへの応答としての発言、挙手
発言（自発性）	授業に関連した自発的な発言
私語	授業に関連しない発言
沈黙	教師による問いかけに対して困惑しているために起こった沈黙

3 教授事象による分類の結果

授業者 20 名の導入部を、表 1 で示した教授事象に秒単位で分類した（表 4）。また、各授業者の導入の総時間数を 100%として、教授事象ごとにパーセンテージを算出した平均値について図 1 に示す。

表 4 教授事象の分類結果

	授業者																			
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T
学習者の注意を喚起する	177	262	91	0	343	104	298	267	160	76	180	16	0	166	61	0	203	214	68	108
学習目標を知らせる	28	5	177	20	74	6	7	6	43	27	21	5	2	15	10	5	246	5	11	32
前提条件を確認する	0	7	17	435	0	0	0	0	0	0	0	70	235	0	0	254	80	3	0	0
その他	25	0	8	0	129	0	97	27	0	9	37	0	37	17	11	0	0	177	152	2
合計	230	274	293	455	546	110	402	300	203	112	238	91	274	198	82	259	529	399	231	142

(単位：秒)

まず、授業者 20 名が導入に割いた時間は平均して 4～5 分程度であった。今回は、15 分の模擬授業というように時間設定をしており、多くの授業者が音楽的な内容を少しでも深めたいという意識があったため、導入に多くの時間を用いず、早く展開部に入りたいという気持ちが現れていた。

「音楽科授業論」の初回の授業日には、授業に必要なこととしてガニエの 9 事象について講義した。その上での模擬授業であるが、導入における 3 事象を全て扱った授業者は 5 名であった。3 事象の中で 20 名の授業者全員が扱ったのは「学習目標を知らせる」ということであり、本時の授業内容を学習者へ伝えることはできていた。

「学習者の注意を喚起する」ことについては、3 名の授業者 (D, M, P) 以外は全員扱っており、その内容はクイズであったり、授業の内容につながる世間話であったりと多様だったが、図 1 の割合を見ても導入時間の 56% を占めており、ほとんどの授業者が多くの時間を使って学習者の注意を喚起させよう意識していたことがわかる。「前提条件を確認する」ことについては、8 名の授業者しか扱っていなかった。この 8 名の授業者の中でも特に「前提条件を確認する」ことを大きく扱っているのは、3 名の授業者 (D, M, P) であり、「学習者の注意を喚起する」ことを扱っていない 3 名である。この 3 名の授業は表現 (歌唱・リコーダー) の授業であり、本時の内容に入る前に前回の復習がどうしても必要な内容であると位置付けている授業であった。したがって、この 3 名 (D, M, P) の授業については、導入のほとんどの時間を前回の復習に当てていた。

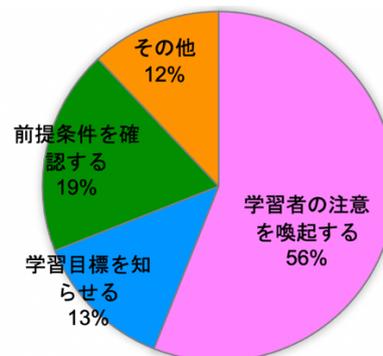


図 1 教授事象の割合の平均

4 教授行為による分類の結果

授業者 20 名の導入部を、表 2 で示した教授行為に秒単位で分類した (表 5)。さらに 20 名全員の教授行為それぞれの秒数を図 2 に示す。

表 5 教授行為の分類結果

	授業者																			
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T
指示	10	14	4	85	7	0	0	0	3	0	19	3	2	49	0	18	90	0	11	0
発問	21	0	0	0	14	0	9	0	17	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0
説明	33	86	121	165	204	34	156	155	98	95	109	73	79	51	33	80	107	100	38	81
評価	5	5	4	21	4	0	0	0	0	0	0	0	9	0	0	5	22	0	2	0
応答	19	0	30	7	31	12	24	6	14	3	11	3	19	14	3	18	7	0	1	2
質問	22	10	36	8	29	21	19	6	15	3	29	9	0	1	7	31	13	9	2	30
活動	53	160	72	138	83	7	21	29	8	2	20	5	96	71	27	98	291	134	63	26
誘導	0	12	4	11	0	0	11	7	0	0	0	1	29	0	0	3	15	0	0	0
指名	17	0	0	0	26	0	5	0	8	0	12	0	10	0	0	0	0	0	0	0
注意	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
確認	7	0	11	0	7	0	0	6	4	0	24	0	0	0	0	8	1	0	0	0
板書	21	0	0	15	102	27	0	0	36	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
操作	2	0	11	0	0	0	8	7	0	0	1	0	0	0	0	0	0	103	0	0
沈黙	0	0	0	0	17	9	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0
その他 (内)	0	0	0	0	24	0	0	0	0	0	0	0	23	0	0	0	0	20	0	0
その他 (外)	0	0	0	0	0	0	96	14	0	9	13	0	7	12	9	0	0	33	119	1

(単位：秒)

16 の教授行為の中で最も多くの時間を割いているのは「説明」であり、次いで「活動」であった。「説明」が約 1900 秒、「活動」が約 1400 秒使っているのに対し、それ以外の教授行為は約 300 秒以下であり、ここには大きな差があると言える。授業者の模擬授業における導入のほとんどの時間を「説明」と「活動」が占めているということである。また「説明」と「活動」は 20 名全ての授業者が行っていた。

学習者に問いかける「発問」と「質問」では、学習者の思考を促す「発問」は、授業に深く関係しない「質問」の5分の1程度の秒数であった。授業者たちは、学習者を授業に参加させるためにできる限りの問いかけを行ったと考えられ、「質問」については20名の授業者のうち19名が行っていた。しかしながら、一問一答の単純な質問が多く、本時の内容に迫る「発問」ではなかったため、展開部への意欲には繋がりにくかったと考えられる。

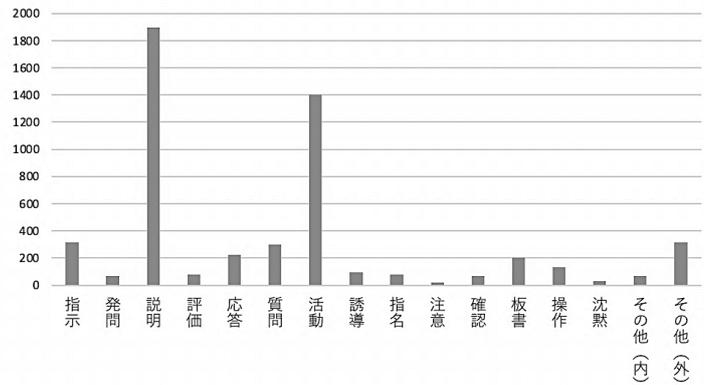


図2 20名の授業者による教授行為の時間数 (単位: 秒)

模擬授業の中では、授業者からの質問や発問に対して学習者は答えているが、「質問」と「発問」の秒数に比べ、「評価」の秒数は77秒であり、さらに「質問」は19名の授業者、「発問」は5名の授業者が行っているが、「評価」は9名の授業者しか行っていないことから、学習者の発言への評価が少ないことがわかる。

授業進行や授業内容に特に関わらない「その他(外)」が313秒で、これは「説明」や「活動」を除くと、最も多い秒数となっている。また10名の授業者が「その他(外)」を行っており、授業に関係ない発言や事務連絡などに時間を多く割いてしまっていると言える。

さらにここで「活動」について、学習者の活動として詳細に分類する。「活動」は20名の授業者全員が行っていることであり、学習者の活動として捉えると、「音楽活動」「話し合い」「発言(応答)」「発言(自発性)」「私語」「沈黙」に分類することができる。その結果を以下に示す。

表6 「活動」のうち学習者の活動の分類結果

	授業者																			
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T
音楽活動	11	156	0	123	0	0	0	0	0	0	8	0	76	29	23	72	242	113	45	0
話し合い	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	31	0	0	47	0	0	0
発言(応答)	30	2	54	15	56	7	12	28	8	2	12	0	18	11	4	15	2	19	16	23
発言(自発性)	7	0	18	0	20	0	9	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	0	0
私語	5	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	0	0	2	0
沈黙	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	3

(単位: 秒)

20の授業のうち、19の授業で学習者の「発言(応答)」が行われている。これは、19の授業で授業者からの「質問」が行われているため、それらに対応する学習者の発言である。また、秒数を総計すると「音楽活動」が898秒となり、最も多くの時間を使っているように見えるが「音楽活動」は、楽曲の鑑賞や歌唱、リコーダー演奏など、発言に比べて多くの時間を必要とする。実際に「音楽活動」を扱っているのは、11の授業のみである。したがって、これについては秒数ではなく回数で計算し、その総計を表7に示す。

表7を見ると、「発言(応答)」の回数が133回と最も多くなっており、やはり授業者は模擬授業の中で、学習者の発言をできる限り多く促したことがわかる。しかしそれに比べ、「発言(自発性)」の回数が24回と少なく、学習者が自由に発言する場面があまり見られなかった。つまり授業者主体の授業が多く行われていたことが想像される。

表7 学習者の活動の回数

	合計
音楽活動	27
話し合い	2
発言(応答)	133
発言(自発性)	24
私語	6
沈黙	5

(単位: 回)

5 学生の模擬授業における導入部の傾向

ガニエの9教授事象のうち導入の3事象と、教授行為の分類により、学生にとって初めての模擬授業の導入部における傾向として以下の5点が明らかとなった。

1点目は、3事象のうち「前提条件を確認する」ことを扱っている授業者が少ないことである。講義で伝えた3事象のすべてを扱っている授業者は5名しかおらず、特に「前提条件を確認する」ことを扱っていた授業者は8名しかいなかった。これは、授業者が授業学年以前のカリキュラムについて把握できていないこと、また教材研究の不足が原因である。模擬授業全体(50分)の指導案でも、その教材のすべてを網羅するような詰め込み型の指導案が多く見られ、焦点を絞った授業を構成することができていなかった。近年はコンピテンシーの育成が叫ばれ、「何を知っているか」ではなく、知識を活用して「何ができるか」が重要とされつつある(松尾 2017, p.9)。音楽科の授業においても、既習事項を含めた前提条件を確認することは、すでにある知識を活用した新たな学びにつながると考えられる。

2点目は、3事象のうち「学習者の注意を喚起する」ことに多くの時間を使っているにもかかわらず、教授行為の分類においては、その時間のほとんどが「説明」であったことである。展開部の授業内容につながる導入部を目指し、授業内容に関連した授業者の発言が多かったが、結局は授業者からの「説明」ばかりになっていた。先行研究によると、新任教師は熟練教師よりも「説明」を重視することが明らかとなっている。この傾向が学生の模擬授業でも見られたことになる。学生の授業後の感想などによると、初めての模擬授業で、自分が準備したことを話すことでいっぱいになっており、また学習者に質問しても、予想した答え以外のものが返ってきたときに対処する余裕がないため、積極的に学習者に発言させることができなかったと述べている授業者もいた。臨機応変な対応力は一朝一夕に身につくものではないが、授業者からの「説明」のみで学習者の意欲を引き出すことは、いわゆる話術のように別の能力も必要となることを事前に知らせる必要がある。

3点目は、20名の授業者全員が学習者の積極的な参加を狙って何らかの問いかけを行っていたが、そのほとんどが「質問」であり「発問」ではないことである。模擬授業において「発問」を行ったのは、5名の授業者のみであった。本稿においては「発問」を「学習者の思考を促す問いかけ」とし、「質問」を「授業に深く関係しない問いかけ」とした。実際に「質問」をした授業者たちは、一問一答のような問いかけや、答えが決まりきっている問いかけをしており、学習者の思考を深めることはできていなかった。導入部においては、学習者がその時間の学習内容を学びたいと思うことが重要であるが、今回の模擬授業の導入では、そこまでの意欲の向上につなげることはできていない。

4点目は、学習者への「評価」が少ないことである。先行研究においては、「受容」や「同意」の発話が学習者の主体性や展開部への有効性につながることを示されていた。しかし、今回の模擬授業においては、学習者の発言や活動に対する「評価」がほとんど行われなかった。やはり初めての模擬授業であったため、評価をする余裕や語彙力がないことが原因であるだろう。特に学習者の意欲を引き出すことが重要な導入部において、学習者の発言や活動への「評価」は効果的であると言える。

5点目は、学習者による自発性のある発言が少ないことである。ほとんどの模擬授業において学習者の発言場面があったが、そのほとんどは授業者の問いかけに対する応答であり、自発性のある発言ではなかった。これは学習者が自由に発言する授業の雰囲気作りができていないこと、さらには、自発的に発言するほどの学習意欲が学習者には湧いていないことを意味し、基本的に授業者主体の授業となっていたことが想像される。ただし、今回の学習者は大学生が生徒役を担ったのであり、そもそも生徒役が中高生の生徒の実態を捉えきれていないことも原因の1つであろう。

6 おわりに

本稿では、初めての模擬授業を体験する学生たちの、導入部の傾向を明らかにすることにより、学生の授業力向上のための指導法の検討につなげることを目的とし、分析・考察を行った。その結果、5点の傾向が明らかとなった。授業力は回数を重ね、経験を増やすことが重要な要素であるが、教員養成のカリキュラムの中で、大学4年間のうちに模擬授業を授業者として体験させられるのは多かれ少なかれ2回程度

である。少ない回数の模擬授業の中で、今回の傾向を踏まえたできる限りの準備をさせることができれば、授業力の向上につながるのではないかと期待し、講義内容を検討していきたい。

注

- 1) 新型コロナウイルス感染症への対策のため、隔週で半分の学生を対面授業とし、残りの半分の学生はオンライン会議システム Microsoft Teams にて受講させた。
- 2) 模擬授業については、15分という時間設定以外は指定していなかったため、学生の中には導入部を省略して展開部から実施した者もいた。

引用・参考文献・Web 資料

- ガニエ, R. M., ウェイジャー, W. W., ゴラス, K. C., ケラー, J. M. [鈴木克明・岩崎信 監訳] (2007) 『インストラクショナルデザインの原理』 北大路書房
- 隅敦 (2019) 「採用1年次の若手教員の図画工作科を含む実技教科授業の導入部における発話の有効性について」『美術教育学』第40号, pp.217-235
- 谷本直美 (2017) 「小学校音楽科の授業における教師の発話分析カテゴリーについて—子どもの主体的な取り組みを支える手がかりとして—」『学校音楽教育研究』第21巻, pp.73-84
- 松尾知明 (2017) 「21世紀に求められるコンピテンシーと国内外の教育課程改革」『国立教育政策研究所紀要』第146集, pp.9-22
- 山中文・酒井美穂・大石美和 (2012) 「音楽科の授業構成研究—熟練教師と新任教師の教授行為の比較を通して—」『高知大学教育学部研究報告』第72号, pp.79-86